

豊橋市 男女共同参画及び性の多様性の尊重 に関する市民意識調査 調査結果報告書 概要版

《調査の概要》

豊橋市では、全ての人々が人として尊重され、それぞれの個性と能力を十分に発揮し、いきいきと暮らすことができる社会の実現をめざし、様々な施策を推進しています。この冊子では、男女共同参画及び性の多様性を尊重する社会づくりに関する市民の意識を把握するために実施したアンケート調査の主な結果について紹介します。

- 調査目的: 本調査は、社会情勢の変化に対応した効果的な施策を展開するため、市民の男女共同参画及び性の多様性の尊重に関する意識やニーズを把握する目的で実施しました。
- 調査対象: 豊橋市在住の16歳以上の男女
- 調査人数: 男女各1,500人 合計3,000人
- 有効回収: 723通(24.1%)
- 抽出方法: 無作為抽出
- 調査時期: 令和5年8月

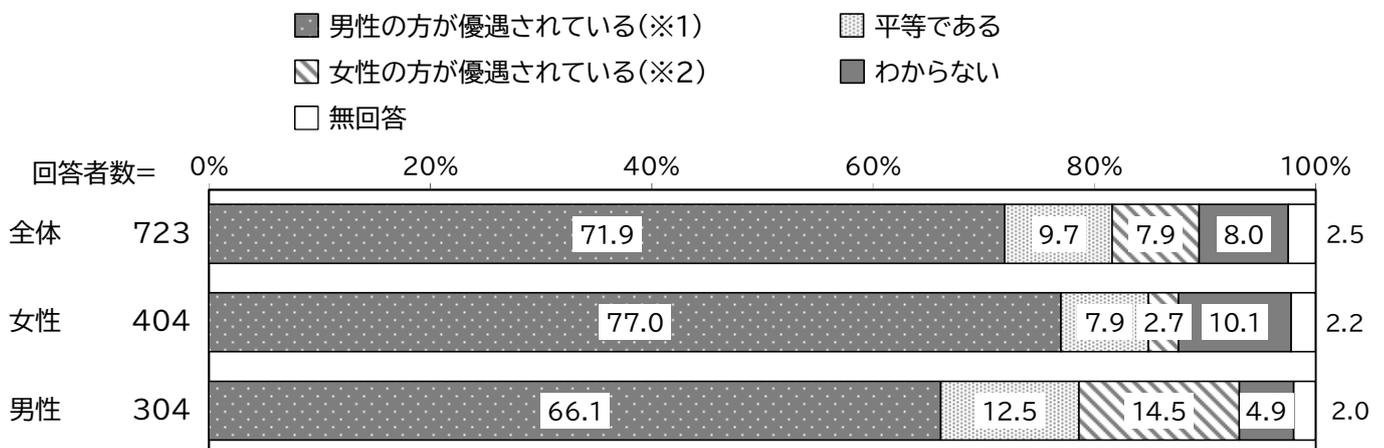


豊橋市 市民協働推進課

TEL:0532-51-2188

令和6年3月発行

- 社会全体でみた男女の地位の平等感についてたずねたところ、約7割の人が“男性の方が優遇されている”と答えており、その割合は男性よりも女性で高くなっています。

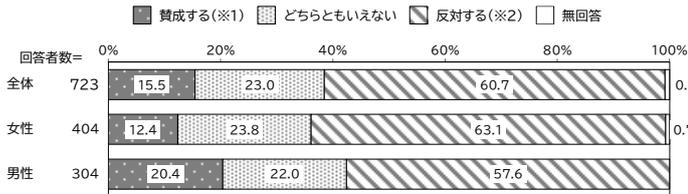


※1: 「男性の方が非常に優遇されている」と「どちらかといえば男性の方が優遇されている」の計

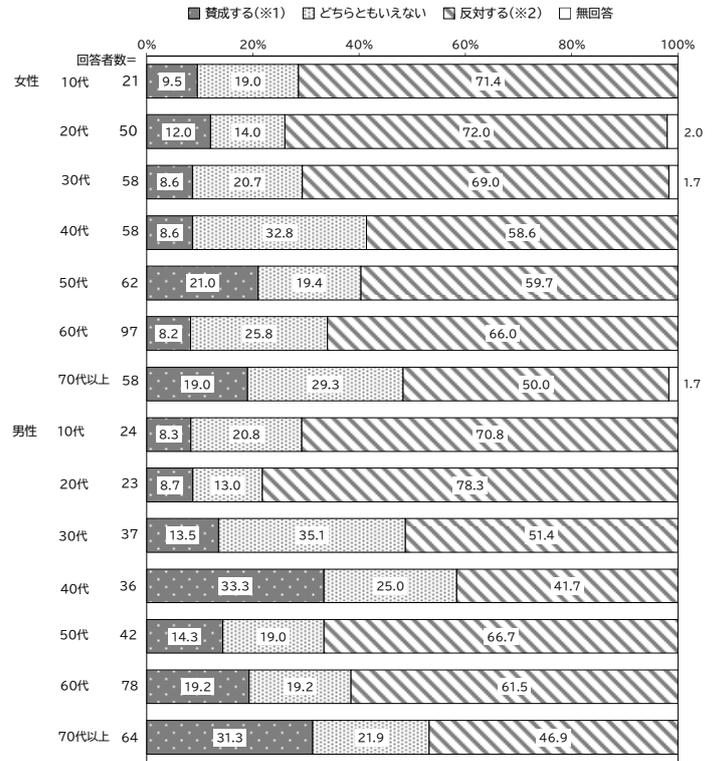
※2: 「どちらかといえば女性の方が優遇されている」と「女性の方が非常に優遇されている」の計

● 「男は仕事、女は家庭」という考え方については、6割の人が「反対する」と答えています。

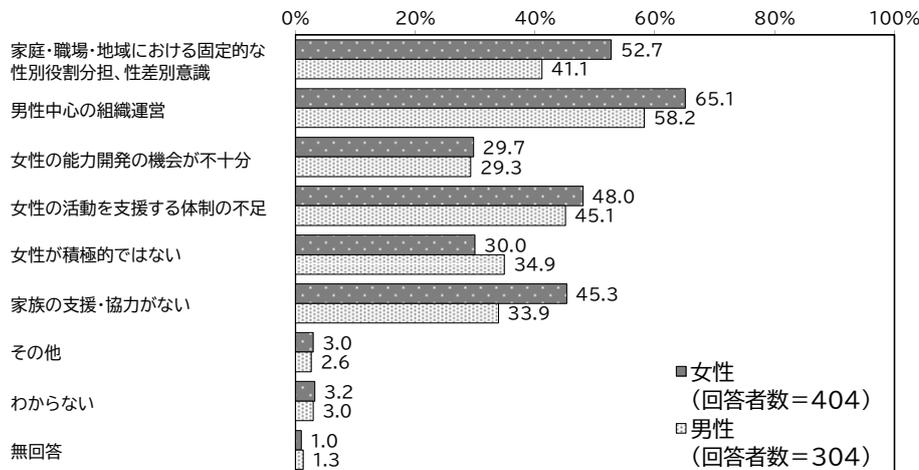
- 男女別で見ると、女性に比べ、男性で「賛成する」の割合が高くなっています。
- 年代別で見ると、女性の50代及び70代以上、男性の40代及び70代以上で「賛成する」の割合が高くなっています。



※1：「賛成する」と「どちらかといえば賛成する」の計
 ※2：「どちらかといえば反対する」と「反対する」の計



● 政策や方針決定の場への女性の参画状況が男性よりも低い理由を複数選択でたずねたところ、「男性中心の組織運営」の割合が最も高く、次いで「家庭・職場・地域における固定的な性別役割分担、性差別意識」、「女性の活動を支援する体制の不足」の割合が高くなっています。



● 休日では、男性では『趣味・レジャーなどの余暇活動』が最も長いのに対し、女性では『家事（掃除・洗濯・炊事など）』が最も長くなっています。

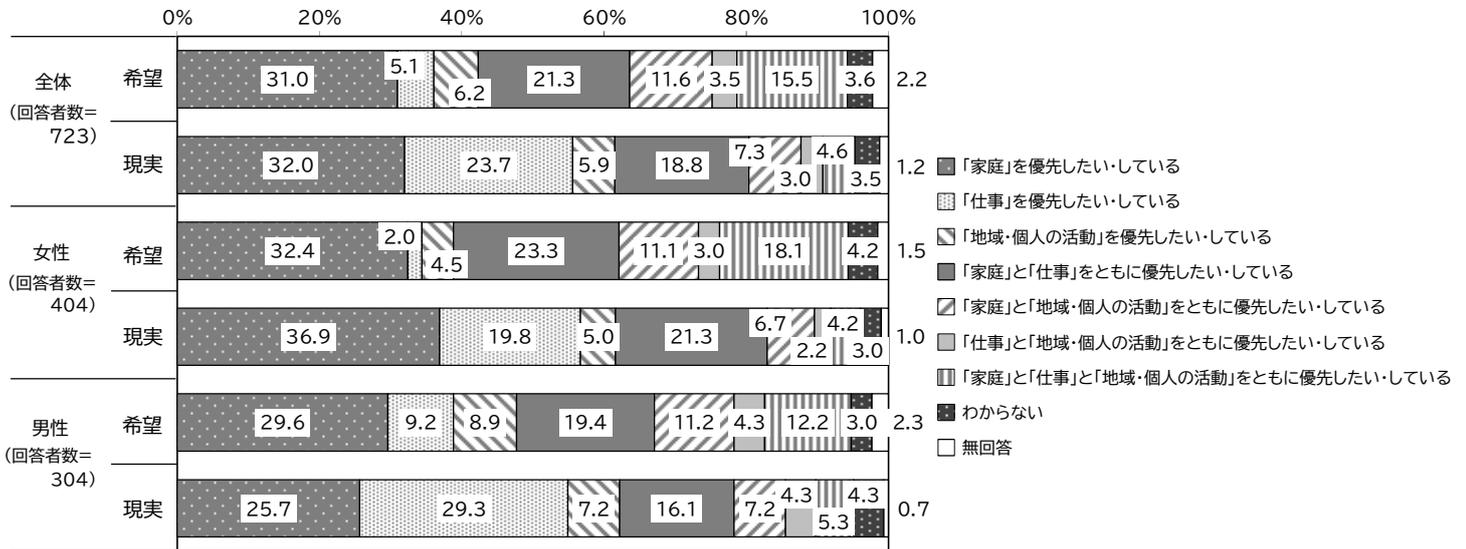
● 平日では、男女とも『仕事（収入の得られる労働）』の時間が最も長くなっています。

単位：時間

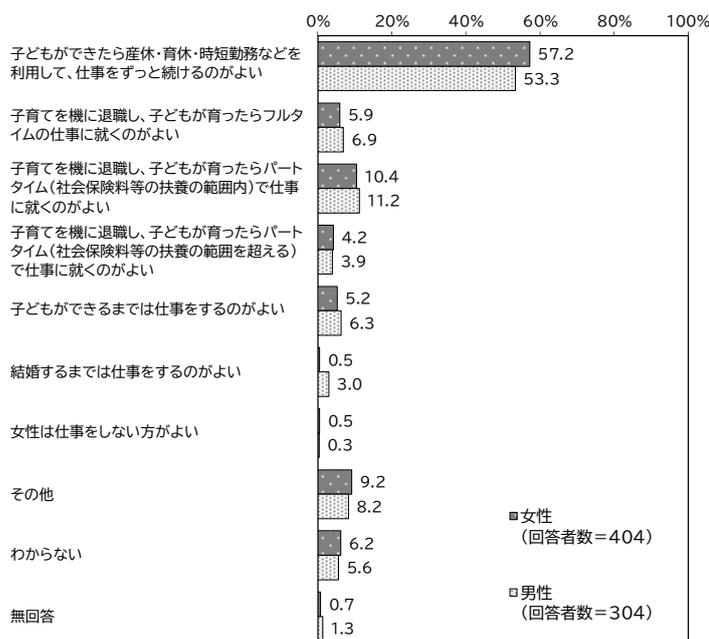
| | 平日 | | | 休日 | | |
|--------------------------|------|------|------|------|------|------|
| | 全体 | 女性 | 男性 | 全体 | 女性 | 男性 |
| A 仕事(収入の得られる労働) | 5.70 | 5.12 | 6.52 | 1.55 | 1.59 | 1.52 |
| B 家事(掃除・洗濯・炊事など) | 2.53 | 3.51 | 1.23 | 3.00 | 4.14 | 1.49 |
| C 子育て(乳幼児から学生まで) | 1.37 | 2.13 | 0.41 | 2.09 | 2.89 | 1.09 |
| D 介護・看護 | 0.32 | 0.44 | 0.17 | 0.35 | 0.47 | 0.21 |
| E ボランティア・NPO活動 | 0.08 | 0.05 | 0.11 | 0.14 | 0.11 | 0.17 |
| F 地域活動(自治会の530運動・資源回収など) | 0.08 | 0.07 | 0.10 | 0.17 | 0.17 | 0.17 |
| G 趣味・レジャーなどの余暇活動 | 1.40 | 1.46 | 1.32 | 3.30 | 3.09 | 3.59 |

● 「家庭」、「仕事」、「地域活動」との優先順位の希望と現実について比較すると、全体では、「仕事」を優先の割合が希望の 5.1%に対し、現実には 23.7%と希望と現実の差が大きいことがうかがえます。

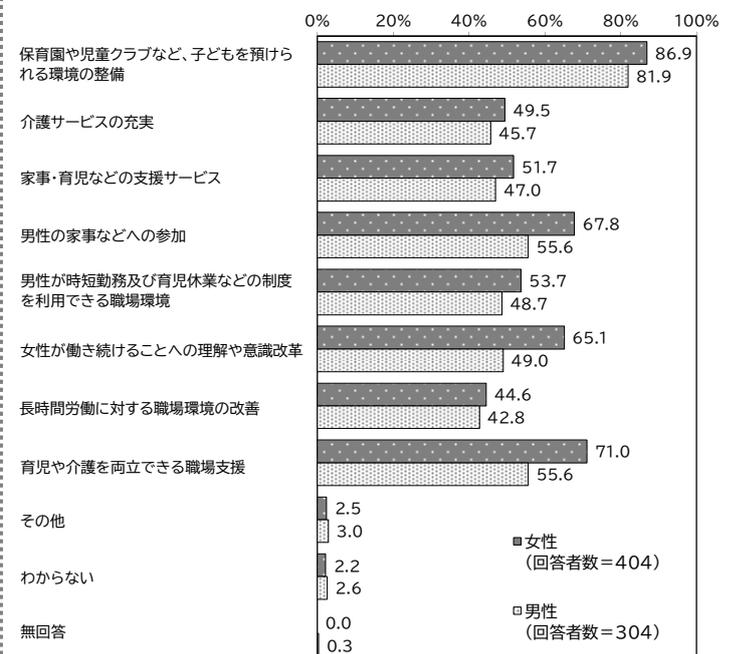
● 男女別で見ると、女性の「家庭」を優先しているの割合について、希望が32.4%に対して現実が36.9%と高くなっています。



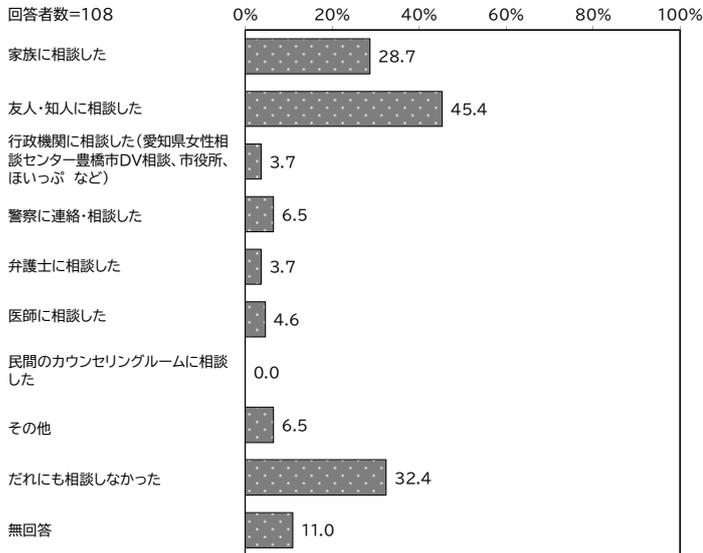
● 女性が仕事をする事についてどのように思うかをたずねたところ、「子どもができたら産休・育休・時短勤務などを利用して、仕事をずっと続けるのがよい」の割合が高くなっています。



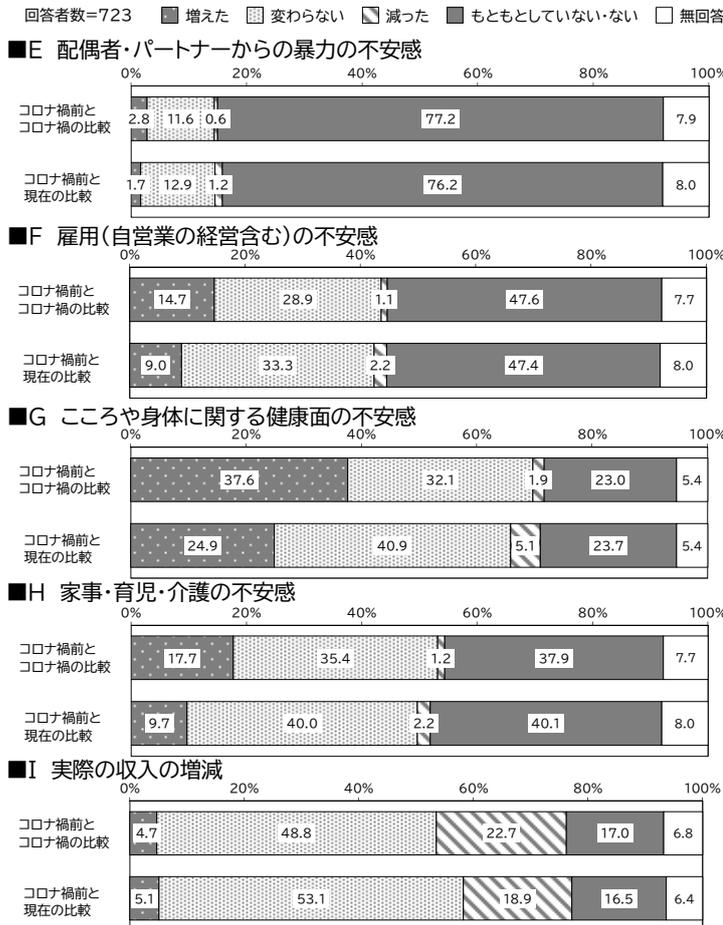
● 働くことを希望する女性が働き続けるために必要だと思うことを複数選択でたずねたところ、「男性の家事などへの参加」や「女性が働き続けることへの理解や意識改革」、「育児や介護を両立できる職場支援」といった男性側・職場に求められる項目で男女の差が大きくなっています。



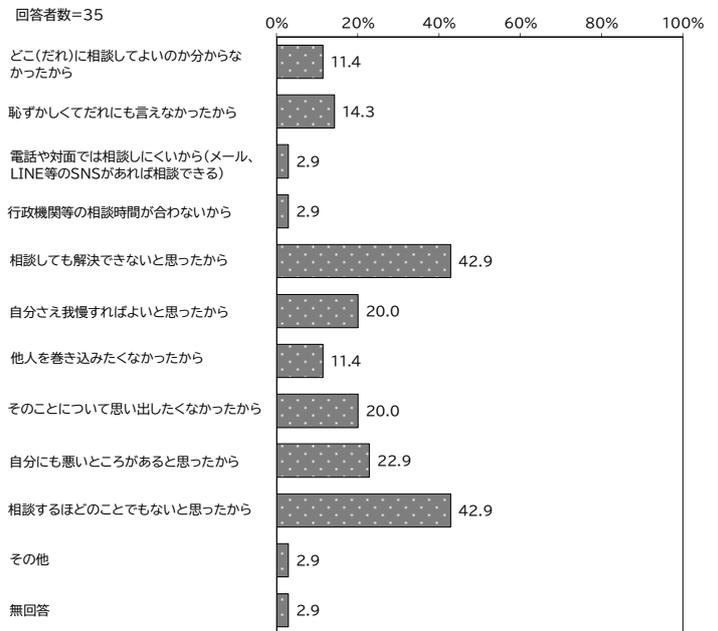
● 配偶者や交際相手から受けた暴力行為 (DV)について誰かに打ち明けたり、相談したりしたかを複数選択でたずねたところ、「友人・知人に相談した」の割合が4割半ばで最も高くなっています。



● 新型コロナウイルス感染拡大後の不安感の変化をたずねたところ、「変わらない」の割合が高く、コロナ禍前の状況に戻つつある現状がうかがえます。

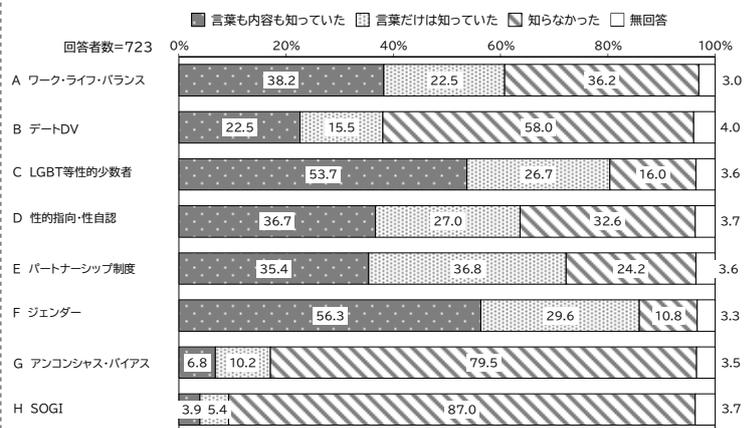


● 暴力行為(DV)について相談しなかった理由を複数選択でたずねたところ、「相談しても解決できないと思ったから」の割合が最も高く、次いで「相談するほどのことでもないと思ったから」の割合が高くなっています。



● 『LGBT等性的少数者』、『パートナーシップ制度』、『ジェンダー』については、7割を超える人が“知っていた(※)”と回答しています。

● 一方、『アンコンシャス・バイアス』、『SOGI』については、約8割の人が「知らなかった」と回答しています。



※「言葉も内容も知っていた」と「言葉だけは知っていた」の計